

国語

I

出典

矢野智司・佐々木美砂 『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか——空間の絵本学』（勁草書房）

解答

- 問1 1—② 2—④ 3—③ 4—① 5—⑥
問2 ④

問3

②

問4

①

問5

A—③

B—⑤

C—⑥

D—①

問6

⑤

問7

ア—⑤

イ—③

ウ—①

エ—②

問8

③

問9

④・⑤

解説

問2 「人間は自分たちと動物とのつながりと差異とを知ることによって、ヒトから人間へと変容した」という文脈を押

さえること。「動物」がいなければ「人間」は、「ヒトから人間へと変容」できなかつたのである。

問3 第二段落に「人間は自分たちと動物とのつながりと差異とを知ることによって、ヒトから人間へと変容した」「同じことは個人の発達のプロセスにおいても生じます」とある。この内容に合致しているのは②である。③は「人間語を話したり二足歩行をしたりする動物を描くことでヒトが人間へと変容した」がおかしい。

問4 空欄の直前のように、「人間はすべての存在者たちと同等となり、風景の一部となる」とは、①の「人間の方が世界化される」ということである。④のように「世界が人間を解体する」のではなく、次段落で説明されるように、「世界との境界が溶解」するのである。

問6 ⑤が第五・六段落の内容に合致する。①は「意味のない体験」が不適。②は第六段落に「言語化の困難なところこそ体験の優れた価値はある」「意味として定着できないところに、生成としての体験の価値があります」とあるので、「人間を超えられる」という点で価値のある」が不適。③は第六段落に「主体が溶解する」「有用性の秩序を作る人間関係とは別のところ」とあるので「主体を喪失する」「人間の世界における関係性の中で」が不適。④は「喜びの瞬間を味わうのみ」が不適。

問8 傍線部の段落によれば、「発達の論理」では、動物は「社会的な次元で一人前になるための人間関係の育成」のための手段である。さらに、最終段落に、動物は「有用性の世界を破壊し仲間を固まった共同体の生を超える、導き手としての『他者』でもある」とある。これらに合致するのは③である。①は「発達の論理」が「人間の存在の理由を解き明かすため」となっており不適。②は「共同体のなかの自分としての生」が不適。正しくは「仲間を固まった共同体の生」（最終段落）である。「指針」も不適。「導き手」「他者」と「指針」は異なるものである。④は「発達の論理」が「有用な人間を育成するため」となっていることと、後半が「共同体のなかで生きる術を伝える」となっていることが不適。⑤は「誤った理解」が不適。

問9

①「目的—手段関係」は「人間化」によって可能になった（後ろから二段落目）のだから、その破壊は「人間が存在する理由」にはならない。

②「動物を実際に飼育することによってのみ」が不適。動物絵本でも体験できる。

③「人間の存在意義からの解放」が不適。[D]を含む段落には「人間であることの中心性を失い」「人間を超えること（人間でなくなることを体験する）」とあるが、「存在意義からの解放」ではない。

④[C]で始まる段落に「この絵本は人間が生きていくもつとも基本的な構造（『人間になること』と『人間を超えること』の二元性）を描いているのです」とあり、最終段落には「動物とともに生きる子どもは、動物と出会うことによって『人間になること』と『人間を超えること』という二重の世界を生きることができるとあるのと同じ体験ができるといえる。

⑤第三段落に合致する。

⑥「たとえ親が不在でも」が不適。

II

出典

長滝祥司『メディアとしての身体——世界／他者と交流するためのインタフェース』（第2章 身体・スポーツ・ヴァーチャル現実 4 ヴァーチャル現実（VR）と道徳）（東京大学出版会）

解答

問1 1—④ 2—② 3—① 4—③ 5—⑥

問2 ア—② イ—① ウ—③ エ—①

問3 A—③ B—⑤ C—④ D—②

問4 ①

問5 ②

問6 ④

- 問 7 ⑤
問 8 ①
問 9 ③
問 10 ④

解説

問 4 傍線部以降の内容を正確に読み取ればよい。「失敗した原因は、ある点で現実世界と似すぎていたことにある。……すぐに飽きられてしまった。なぜならそれは、……現実世界ですでに経験していることだから」とある。この内容に合致しているのは①である。

問 5 空欄直後に「新しい身体によって与えられる世界は、知覚世界と依然として似ている」とある。第七段落で「ある程度はヴァーチャル身体でそれを再現する必要がある。すなわちボディランゲージや……身体的接触などだ」というように、身体的接触などを再現しなければならないという制限がでてくることになる。

問 6 考え方は問5と同じである。身体を通して知覚する以上、「ヴァーチャル身体」であっても「ボディランゲージや……身体的接触など」を「再現する必要がある」ということ。①・②「手紙や電話のようなアナクロな媒体」も「ある性質を共有している」(第四段落)ので、「デジタル技術の発展」とは無関係。③「言語やアナクロな機器」によるコミュニケーションで、「自由自在に自らの身体を変化させることができる」ということはない。⑤「現実と異なる身体が勝手に形成されてしまう」が不適。

問 7 傍線部直後の「完全な意味での身体性……アバターというかたちでAIに組み込もうとしている」「VR技術のそれは、現実のもつ質感の完全コピーを目指している」から考える。①「人間の想像力」を利用するわけではない。②「現実世界では味わえない体験」を目指しているのではない。③「言語コミュニケーションを基盤」としているのではない。④「小説のもつ現実とはまったく異なる世界を現実世界に落とし込もうとしているのではない」。

問8 空欄直後に「相手の身体と相互作用ができるのは、たがいの身体が特有の感じやすさをもっているから」とある。

「相手の身体と相互作用」「感じやすさ」とある以上、実際の「身体的な接触」が伴わないといけない。選択肢の中で、具体的な身体的接触に触れているのは①だけである。

問9 「これは恐ろしい分断」とあるなかの、「これ」の指示する内容と、何と何との「分断」なのかを正確に押さえる必要がある。「これ」は直前の「相互理解や道徳の基盤である身体の傷つきやすさへの感覚が脆弱になる」「異なる道徳の基盤をもつ」を指している。また、「分断」も直前の内容から「VRネイティブ世代と古い世代」との分断であることがわかる。この二つの内容を含むのは③である。

問10 ①第一段落にあるように、「ヴァーチャル世界は二〇〇〇年代後半にかなり話題」となっていたので、「コロナ禍」によつてヴァーチャル世界が誕生したわけではない。

②「小説や手紙……アナクロナメカたち」が「急速に衰退していった」とは書かれていない。

③第五段落に「人間の想像力を排除する方向にむかう」とあるので、「人間の想像力の可能性を探る」は不適。

④第九段落の「身体的な接触を重視するのは、それが相互理解の基盤であり、さらには無意識の道徳の基盤だからである。身体的接触の重視は、われわれに共通する傷つきやすさ……も前提にしている」に合致している。

⑤「旧来の道徳性に論理性を付加した」「あらかじめ確立しておく必要がある」が合致しない。